

自家瞳遺聞：怡親王弘暁と紅樓夢

加藤，昌弘

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

81

(開始ページ / Start Page)

23

(終了ページ / End Page)

46

(発行年 / Year)

1992-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004702>

白家瞳遺聞

怡親王弘曉と紅樓夢

加藤 昌弘

この小文は、清の曹雪芹せうせつしんの「紅樓夢」の現存する最も古い写本「脂硯齋重評石頭記・己卯本（己卯冬月定本）」成立の背景について若干の考察を試みたものである。この写本の問題は（一）原作者曹雪芹在世中に曹家と密接な関係にあった怡親王弘曉いしんおうによって製作されたもので、直接曹雪芹の原稿を底本にしている可能性が強いこと。（二）この写本の半分はすでに失われてしまったが、ほぼ完全に残されている「脂硯齋重評石頭記・庚辰本（庚辰冬月定本）」の底本になったか、あるいは同一の底本にもとづく姉妹本かいずれかであることで、庚辰本本文の価値、すなわち現代中国の校訂本の価値に関わっている。

私はここで「紅樓夢」の作者曹雪芹と「脂硯齋重評石頭記・己卯本（己卯冬月定本）」の製作者怡親王弘曉との関係を述べてみたい。はたして「己卯本」は曹雪芹の原稿に基づくもので、その忠実なコピーなのであろうか。そして「己卯本」と酷似しており、前八十回の全貌をほぼ完全に留めている「庚辰本」を底本にして校訂を加えた現代中国のテキストをもとに、曹雪芹の言語と思想を追求して大過はないだろうか。結論を言えば、私達は「己卯本」や「庚辰本」の文字を信頼してよいであろう。ただしその前提として、貧困のうちに「紅樓夢」を書き綴った曹雪芹の別の一面、怡親王府や平郡王府、そして愛新覺羅敦敏や愛新覺羅敦誠という下り坂をたどりつつある北京の貴族たちとの、作品を介しての密接な係わりを「己卯本」や「庚辰本」成立の背景に考えておくことが必要である。何故なら、それらの写本は決して曹雪芹と無関係の有閑貴族によって製作されたのではなく、曹家のたどった運命と自ら置かれた立場とを結び付けざるを得ない「一群の詩人たち」の共有財産という性格をもっているからで

ある。共同製作というような意味ではなく、極めて自伝的要素の濃厚な個人的創作である「紅樓夢」に、自らの運命と時代とを重ね合わせてしまった人々、怡親王弘曉、愛新覺羅敦敏・敦誠兄弟という皇族のやり場のない感情がこの作品の完全な写本の製作に拍車を掛けたからである。その一端をこれから考えてみる。

北京香山正白旗における報告をまとめた私は、「脂硯齋重評石頭記・己卯本（己卯冬月定本）」成立に重要な役割を果たしたと思われる北京西山白家疇地区の調査を行った。怡親王、曹雪芹、「紅樓夢」、愛新覺羅敦敏をつなぐ線が必ずここを通過しているからである。曹雪芹はある期間をここで過ごし、極秘の交際をもち、「脂硯齋重評石頭記・己卯本（己卯冬月定本）」の底本を完成している。白家疇とは如何なる所で、何故そこが「紅樓夢」成立に重要な意味をもっているのか。それを明らかにすることは不十分な資料しかない段階では困難である。しかし現存するわずかな資料からなんらかの暗示を受け取ることはできる。

一 白家疇の村

白家疇は美しいところである。

この村の南にあるいわゆる「金山三環」の山々は、北京城内に近い南側の香山路あたりから見るとほとんど水平に近いような稜線だが、北側にある白家疇から見ると山々の一つ一つがそれぞれの明暗をくっきり示している。この村の西側にも南北に山々が連なり、一番近くにある成子山が果樹園の向こうに均整の取れた姿で横たわっている。それぞれの山肌のうねりがここからは見て取れる。（図①）

北京西郊の頤和園から西北に廂紅旗の集落を抜けて、バスで二十分ほど行ったところにこの村はある。白家疇には「西口」と「東口」という二つのバス停があり、その間をつなぐ閑道の両側に石造りの民家が軒を並べている。北風が通り抜けると、何も見えないが、何かがカラカラと音を立てている北中国の乾燥した農村だが、それでも北京近郊らしい良く整ったたたずまいがこの村には感じられる。

文革中に紅衛兵に破壊されたらしい石碑が、枯れた野草の花の横に、叩き割られた頭だけを残して横たわってい



図①



白家囃違景



図②



賢王祠舞台



图③
← 王爺殿部分

門客見打的不行了忙上前奪刀罵
可饒不可饒素日皆是你們這些人
賺到他弑君殺父你們卻不功不成
逃出只得覓人追上給信王夫人不肯
交人忙趕進書房中求饒的血

图④
→ 己卯本部分

る。残されたわずかな文字から辛うじて読み取れるのは、ある愛新覺羅姓の女性がフランス人と結婚し、北京に帰った後、愛してやまないこの白家疇で赤十字活動に尽くしたことを記念したものらしい。この村についての記録は驚くほど乏しい。清朝のころもそうだった。記録と記録との言葉にならないような空間、言わば日常のせつなさのような村である。しかしそれでもこの山村の華やかな時代を伝える記憶はまだ幾らかは生きている。

白家疇は城内から妙峰山に行く途中にある。北京の人々の信仰を集めた妙峯山かいつごろから賑わいを見せ始めたのかさだかではなく、敦崇の「燕京歲時記」にも

「廟中には碣碑がないのでその起源は考えることができないが、しかし、雍正、乾隆年間このかた存在している。惜しむらくはこれを記述したものがいないのである。」

と述べられている。ここから黒龍潭、温泉を見ながら大覺寺に至り、妙峰山参拝の四道のうちの中道に入る。毎年四月の半月にわたるご開帳のときにはこのあたりは往来の人々で賑わったことだろう。温泉の近くの画眉山はかつて金の時代以後宮の婦人たちの使う黛の原料となる黛石を産したところからその名がある。この石は北京西北の山々のあちこちに見られ、時に險しく、時にゆるやかに波打っているこの一帯の造山運動が、遙か太古にこの土地の娘たちのために生み出したものである。雨乞いの霊験あらたかな黒龍潭には康熙、乾隆二帝の石碑がある。

現在の白家疇は山麓のごくなだらかな起伏のある平地で果樹栽培を行い、收穫機にはトラック一杯に積まれた甘い香りの果物が城内に運ばれて行く。頤和園と西山農場を結ぶ幹線道路がこの村の主要な交通路で、二本のバス路線が走り、トラックやジープもかなり頻繁に通過して行く。

もう一本、今では歩くものも少なくなったが、かつては最も頻繁に往来された道がある。それは果樹園の間の道を南に取り、山を越えて臥仏寺の香山正白旗に至る道である。臥仏寺方面から白家疇に至るには徒歩約四時間、白家疇から臥仏寺には約三時間、現在の幹線道路を歩いて城内に行くよりも近く、かつての香山健鋭營周辺もかなり繁華だったために、この道を通して白家疇の産物や人々が香山健鋭營に向かった。かつてふみならされた山道は今でもまだ雑草に埋め尽くされてはおらず、安全に往復できる。

二、白家瞳賢王祠

北京市海淀区白家瞳小学校。北京のどこの小学校にもあるような緑色の鉄の校門があり、その校門の斜め前に民国元年に修築されたという古い野外舞台がある。石と煉瓦を組んだもので、板張りの舞台と前方の隅の二本の柱と欄間、天井は木造である。天井にはなにか絵が描かれているようだが今ではごく強い原色の部分しか顔料が残されておらず、柱の対聯の文字も雨風に削られてしまっていてすべては読み取れない。読み取るのは「看我非」「而非我」などの数文字だけである。

十数畳ほどの舞台の後ろは白い壁だが、その左半分に一間ほどの格子窓と半間ほどの出入口があり、後方の楽屋とつながっている。舞台には無難作に薬が投げ積まれ、楽屋には使い古された竹箆が投げ捨てられている。かつてにぎやかに「西皮」「二黄」が奏でられ関羽や張飛が大太刀回りをし、艶やかな女役が脂粉の香りに嫋嫋と恋ごころをうたったところで、瘦せた野良犬が干乾びた白菜の芯をくわえて、そわそわと薬の中に隠している。

(図②)

小学学の鉄の門を開くと、五十メートル四方ほどの、片隅に細かい煉瓦の破片が散らばった校庭である。校舎に入る中門の白いペンキの上の「天天学習、好好向上」という赤い文字がことのほか鮮やかに感じられ、その中は高い樹木におおわれた清潔な赤煉瓦の校舎群である。この中門の近く、柏楊の陰のあまり人目を引かないところにアーチ型の門をもった朱の禿げた古風な堂があり、門の上の地色をさらけだした木版には「賢王祠」の三文字が認められる。校門の前の舞台はもとこの「賢王祠」王爺殿と、向かい合っていたのである。(図③)

この賢王祠は清の雍正帝の異母弟・十三阿哥怡親王胤祥を祭っており、王爺殿のアーチ型の門に施された神獸や蓮華の彫刻が、親王家の家廟らしい厳かさを留めている。校舎群の一番奥には現在図書館として使われている一番立派な建物・観音殿がある。この観音殿も民国元年に修築されたものである。

この賢王祠に祭られている怡親王胤祥は冷酷な雍正帝がただ一人信頼を置いた兄弟として知られている。九つの

役職を兼任し、戸部の肅正に尽力し、北京西郊の第二離宮臥仏寺の修築と、ここ白家疇の水利工事も任せられていた。怡親王胤祥が世を去ったのは雍正八年五月（一七三〇年）のことで、翌六月にこの白家疇に怡親王祠を建てて祭られた。白家疇小学校の片隅の花壇で飾られた教室の脇に高さ二メートルほどの石碑がある。「勅賜白家疇賢王祠祭田碑記」である。

三、「紅樓夢」と満州貴族たち

ところで、「紅樓夢」のごく初期の写本の一節が怡親王胤祥の子孫によって書き換えられており、この小説の成立する背景には怡親王胤祥の子弘曉の存在が見え隠れしている。愛新覺羅敦敏の「瓶湖懋齋記盛」によれば曹雪芹は乾隆二十三年（一七五八年）の春から十二月までのある期間を白家疇で過ごしている。その翌年には紅樓夢の何度目かの草稿で、脂硯齋による四度目の校閲を経た「脂硯齋重評石頭記・己卯本（己卯冬月定本）」の底本が製作され、おそらく曹雪芹在世中に弘曉の手元にわたり、現存する「脂硯齋重評石頭記・己卯本」が筆写されたものと考えられている。この写本は清末の進士・董康の藏書だったものを陶洙が手にいれて、現在は北京図書館に収められている。ところでこの写本には極だった特徴がある。「玄」「祥」「曉」の文字は一画ずつ缺筆されているが、弘曉の子の「永」の字は缺筆されておらず、七人の筆跡のうち三人のものは北京図書館蔵の弘曉の時代の「怡府書目」のものと一致し、一人の筆跡は弘曉自筆の「明善堂詩集」と一致しているのである。（図④）この写本が弘曉の時に弘曉自身をはじめ、その子の世代のものも含めた七人によって筆写されたことは確実である。さらにこの写本は前八十回がほぼ完全に残されている「脂硯齋重評石頭記・庚辰本（庚辰秋月定本）」と全く同じ格式で、しかも同じ筆跡が見られることから、庚辰本と姉妹関係にあることがほぼ判明している。庚辰本は一九三二年に北城の旗人が隆福寺の縁目に売りに出したものを徐星畧が入手したもので、現在は北京大学図書館に収められている。そしてこの庚辰本の批には一九七七年に発見された「乾隆二十五年」「題芹溪居士句」などとするされた書箱の筆跡と酷似した筆跡が認められる。もしそれが同一人物の筆跡だとすれば乾隆二十五年に成人に達していたものがこの写本

を手にしたことになり、かなり早期の写本ということになる。

怡親王弘暁の「紅樓夢」によせる関心にはなみなみならぬものがあつた。みずからも写本の筆写に従事するようなことは、かれの身分からすれば、無用の労苦のように思える。しかしかれはそうすることによってこの作品と自らとの関わりを確かかなものとしたかつたに違いない。ではいったい「紅樓夢」のなにがそれほどこの皇室につらなる満州貴族をひきつけたのだろうか。

曹雪芹は曹家の没落の過程をつぶさに体験し、この世では結ばれることのない恋を、貴族の没落という時間的経緯のなかの微妙な神経戦として描き切つた。ただ、当時のごく普通感覚からすれば、小説とは「野史」すなわち歴史事実の講釈師の通俗化であり、けして「作家の世界認識のフィクションによる再構成」などと意識されることはなかつた。そのためこの作品がいかなる歴史的「事実」を描いたものなのか、読者はその詮索に夢中になつたのである。曹雪芹自身もそのあたりを逆手にとつてかなりはつきりと歴史的事実を暗示している。ただし満州族文化の漢化にとまなうかなり決定的な言語の交替がその時代にあり、まして今日では背後にこめられた意味が分からなくなつてしまつた俗語が使われているので、今日それを理解しようとすればどうしても乾隆年間の北京西郊の歴史、風土、言語に着目しなければならなくなる。それは「紅樓夢」の語句の解釈にもかかわってくる。

四、平群王府と「饅頭庵」

一例を挙げると作品の中で賈家の菩提寺とされている「饅頭庵鉄檻寺」がある。現在ではこれは作者が范成大の「縦有千年鉄門限、終須一個土饅頭」（千年の鉄の囲みと誇るとも、ついにはやっばり土饅頭）という句から取つたというのがもっとも妥当な解釈にないており、たしかにこれは貴族の没落という「紅樓夢」の世界にふさわしく、作者も一方でこの句を連想させるように命名したに違いない。しかし作品の背景となつた乾隆初年のまだ満州王朝清国建国の神話が生きていた北京西山の風土に着目するとき、実はこれは太祖ヌルハチの次男で太宗ホンタイジの実兄である礼親王ダイシャンと、その子孫のことをほのめかしているものと受け止められる。ダイシャンの墓

地礼王墳は現在の門頭村にあった。西直門から西に約十キロ、香山正白旗からは山沿いに南に下った正紅旗營で、かつてここに暮らしていた老舎が「金玉紅樓終は夢、鏖鎗碧野遍開花」と郭沫若に書き贈ったところである。この門頭村は明代には饅頭村と呼ばれており、清代に門頭村と書かれるようになった。現在でもこのバス停は「門頭村」というが、住民たちは「饅頭村」あるいは「饅村」と呼び習わしている。そして作品に描かれた地理関係を見、曹家の失われた榮華の背景を見ると、この菩提寺「饅頭庵」が「饅頭村」の「鉄帽子王」礼王墳をはめかしていることは明らかである。不必要な詮索から身を守るならば作者はむしろ「饅頭庵鉄監寺」などという命名は避けるべきだったはずである。ではなぜあえてこのような命名をしたのだろうか。

ここで作者は確かに礼親王ダイシャンの子孫をはめかしている。乾隆元年から十三年まで満州正白旗都統の任にあったのは平郡王福彭であった。福彭は礼親王ダイシャンの七代目の子孫に当る。満州正白旗都統といえは没落したといえ曹家にとってはかつての役職であり、この時には直接の上司である。さらにこの福彭の母、つまり父平郡王ナルスの妻は、曹雪芹の祖父曹寅の娘なのである。福彭は曹家の強力な後ろ盾であった。ところが乾隆十三年、福彭が世を去り、後を継いだ福彭の長子は夭折し、乾隆十九年には福季の子慶恒が位を継いだ。役職は廂紅旗漢軍都統、格下げである。曹家との血縁は途絶え、福彭の頃とは一変して曹家に対して冷淡な態度を取るようになった。「紅樓夢」第六回、劉ばあさんが遠い親戚の賈府を訪ねて困惑しながら金をめぐんでもらう場面に記された脂批の数々がこの間の事情を語っていると思われる。没落した曹家の人々がたしかに平郡王府をたずねたらしい苦々しい思い出である。

「貧乏な親戚が訪ねて来るのも好意からとか、もとよりこちらから世話をすべきところとかの教語。余はまた石頭記のなかでお目にかかった。嘆くべし。」

曹家とダイシャンの子孫とは、冷淡な関係になったとはいえ、曲がりなりにも直系の親戚である。菩提寺を饅頭村の礼王墳になぞらえた背景にはしだいに冷淡になり、かつ自らも衰えて行く親戚平郡王府の姿が暗示されていた。

五、弘暎の危惧

「紅樓夢」には曹家と関わりのある親王府のことが記されている。弘暎はそう考えた。そうであれば、怡親王府も例外ではない。父怡親王胤祥は南京の曹家から届けられる上奏文を雍正帝に取り次ぐ役目で、没落の瀬戸際にいる曹家も、「委細は怡親王に任せるように」という雍正帝自らのお墨つきをもらっている。その後の曹家のたどった道と、怡親王府のたどった道とは肝心なところで接点をもっているのである。父怡親王胤祥は結局彼の父曹頌を救えず、乾隆四年の多くの皇族が断罪された政変未遂事件では自分の兄弟たちと同様曹家の北京での生存も保証できず、曹雪芹は香山の旗営に転がり込んできた。曹家については自明のこととさせておくとしても、もし自分たちの周囲の誰かが朝廷を恨んでいるなどと取られる節があったら大問題である。さらに恐るべきことはこの小説が宮中の極秘事項に触れているという風聞が年配の皇族の間で密かにささやかれている。

賈府の現状を総括するような「成則王、侯、敗則賊」という一句が弘暎の手になる「脂硯齋重評石頭記・己卯本（己卯冬月定本）」に限って「成則公、侯、敗則賊」に改められている。「王侯」の語に何か不隠なものを感じたためである。

六、「勅賜白家瞳賢王祠祭田碑記」

怡親王胤祥なき後、怡親王府のたどった道は胤祥の子弘暎を「紅樓夢」の世界に引き入れるのに十分だった。白家瞳には怡親王胤祥の手掛けた水利工事の跡があり、かつてはこの水路の両側の土地には特殊な恩恵が与えられていた。

この特殊な集落の形成については「勅賜白家瞳賢王祠祭田碑記」に詳しく記録されている。碑文には摩滅している判読の困難な部分も少なくないが、手元に中国曹雪芹研究会の李強氏が他の文献や当地の伝承を基にして缺文を

補ったものがあるので、それを参考にしてこの石碑の概要を紹介することにする。() 内が李強氏の推定、〃は私が補った部分である。

「庚戌の年、雍正八年、一七三〇年、五月、和碩怡親王、胤祥、西山の白家瞳にてみまかりたまえり。この地の民なる張明ら、かの生前の慈しみを思い、祠を建て祭りもうさむと願いいでたれば、内大臣内務府総管戸部左侍郎海望(その旨を上奏せり)。

みことのりありて、允(「一字缺」)に国庫金を出さしめ、それがし海望に建造を命じたまうも、民の労を煩わすを願いたまわず、時三伏に当り、この地の民に祭りを致す備えとてあるまじければ、難儀をかくるは免れずとおぼしめしたまい、村の役人に命じ、錢穀物の税をとこしえに許し、ただ線香料のみをおさめ、この地の良民を潤さしめんとのみ心なり。〔以下概要〕耕地を持たぬ民には土地を分配し、専ら怡親王胤祥の徳を思わしめ、(賢王祠の西の水路沿いの四)十八畝の土地を、賢王祠建造に従事したものに世襲として与え、毎年の祭りに備えさせるほか(困窮した旗人を養うのに用いられた)。この土地の詳細は内務府総管戸部侍郎海望に命じ、四分して宛平県昌平州の管轄下に記録させた。」

この碑文からこの土地が免税の特権をもち、怡親王胤祥を記念すべく、専ら皇帝の恩恵によって特殊な管理がされていたことが分かる。家廟の土地が世襲されることは常識だが、それを白家瞳の一般住民にまで及ぼし、さらに困窮した旗人の生活保護まで約束するというのは珍しいことに違いない。

翌雍正九年には北京のほかにも奉天、浙江に賢王祠が建造され、やがてそれは全国各省に波及していった。それらは臣下が民情を代言して建造を申し出るという形式を踏んでいるが、実は怡親王胤祥に対する雍正帝の感情に訴えかけて政治生命の安定を謀ったものに他ならない。このことから雍正帝の時代に怡親王胤祥がいかなる地位を占めていたかがうかがえる。

七、雍正帝の死

十三年八月、雍正帝が世を去った。「清史演義」や「清朝秘史」のようになりの文献をあさって書かれた小説がそれを女侠の暗殺としていることは興味深い。一方で雍正帝は道教に凝って道士の金丹を飲んで死んだのだという説もある。

霍雪玲、霍紀平のように「紅樓夢」がこのことの実相を暗示しているという見方もある。それによれば、かつて曹雪芹の愛した侍女「竺紅玉」が雍正帝に奪われ、雍正帝を暗殺したのち曹雪芹のもとに帰るといふかなり「大胆」な内容である。しかも、この説が発表されたのはごく最近の一九八九年のことであり、北京の人々にとって清宮の謎と「紅樓夢」がいまだにある重さをもっていることが感じられる。（紅樓解夢）

曹家は雍正帝に対して消すことのできぬ恨みを抱いていた。

雍正五年に南京の江寧織造の職を没収された曹家の人々が、そのことを深く恨んでいたことが「紅樓夢」の次の一節からも分かる。第一回、愛嬢英蓮を抱いている甄士隱の前でかさかき頭でびっこの僧侶が大笑いしてよみあげる詩がある。

好防佳節元宵後

便是烟消火滅時

元宵の節句の「後」には氣を付けろ

煙も消えて 火も消える。

この詩には曹家の人にしか分らないいきさつがこめられている。

この年の雍正五年の六月、雍正帝の上着や、宮中の倉にあった江寧織造製造の絹織物の色が落ちていたのが発見された。さらに織造の役人が道中不正な利をむさぼっているという噂が皇帝の耳にはいる。曹頌もしきりに雍正帝に進物するが、帝の反応は冷淡である。

江寧織造奴才曹頌跪進單

「江寧織造奴才曹頌ひざまずいて御進物いたします。

匾對單條字綾一百副（綱雍正朱批、要らぬものだ。もう贈るな。）

箋紙四百張（雍正朱批、こんなにたくさんは要らぬ。少なくしろ。）

湖筆四百枝（雍正朱批、筆はまあ使える。）

錦扇一百把（雍正朱批、こんな無駄なこと、朕は大嫌いだ。ただ墨色の曹扇を愛用している。こんな扇はもう贈るな）」

何と冷淡な口調であらうか。そして十二月十五日、隋赫徳を後任に決め、二十四日、曹頌家産没収の上諭が下される。この丁寧にするされた満文の巻物が開かれたとき、曹家の榮華は終わった。

「江寧織造曹頌は、行い正しからず、織造は多大な赤字を抱えた。朕は幾度も恩を施し寛大にその埋め合わせを謀らした。もし朕の彼の家を気づかう心に感謝するなら、当然ひたすら努力すべきであらう。しかるに彼はこの恩に報おうとしないばかりか、家財を他に移して隠し、朕の恩を無にした。まことに憎むべき所業である。よって江南総督范時繹に命じ、曹家の家財を封じさせ、主だった人々は捕らえ置き、家人の財産も封じさせ、新任織造官員隋赫徳の到着後処分させる。」

この上諭は二十日ほどで南京に届いた。

正月の行事もほぼ終わり、元宵節を迎える直前である。ところで、紅樓夢のびっこの僧侶はこう言った。

元宵の節句の「後」には氣を付けろ

煙も消えて、火も消える。

ある写本（甲戌本）にはこの部分に朱筆が加えられている。

「後」でも「前」でも同じことだ。前と言わずに後と言ったのは、事情を知っている者をはばかったのこと。」
朱筆をくわえた脂硯齋はおそらく曹雪芹より年長の曹家の誰かと思われるが、彼等の間で、雍正帝によるお家没収のことがいつまでも重くのしかかっていたことは、こんなところからも見て取れる。

八、怡親王事件

雍正帝なき後、怡親王府も急に下り坂をたどった。乾隆帝もまた兄弟間の様々な軋轢には頭を痛めねばならなかった。それが形を取ったのが乾隆四年の親王府に対する肅正である。事件は廃太子胤禔の長子庄親王弘晳兄弟がそもそも東宮の直系であることを傘に不遜な態度を見せたというもので、禍は怡親王胤祥の子にも及んだ。具体的に弘晳が神降ろしをして「ジュンガルは北京にくるか」「天下は太平か否か」「皇帝の寿命はどのくらいか」「将来自分はのし上がれるか」などと尋ね、それが臣下にあるまじき行為として乾隆帝の怒りに触れたのだが、乾隆帝はその背後に親王家間の連絡があることを感じていた。この事件で罪に数えられたのは、庄親王允禄、胤禔の子弘哲、胤禔の子弘昇、及び怡親王胤祥の子弘昌と弘皎たちである。廃太子胤禔の子弘哲を中心とする事件に怡親王胤祥の二人の子供が関与していることは重要である。意外にも怡親王はかつて雍正帝に反感を抱いていた人々の精神的支柱となっていた。雍正の時代にはうかつに動けなかったが、乾隆の時代になって父の恨みをその子に報いようとしたのであろう。

この事件のために怡親王の尊厳は完全に地に落ちた。浙江省の賢王祠は早くも関帝廟に様変わりした。乾隆二十年、乾隆帝は各省ともこれに習うようにという直諭を下した。怡親王胤祥を祭ることは無意味だから、関帝廟なりなんなりに改造してしまえというのである。当時怡親王の位についていた弘晳はこれをどのように受け止めたのだろうか。ただ弘晳という人は政争に身をやつすには余りにも詩人肌だった。

九、怡親王弘晳と「西山詩派」

怡親王弘晳（一七二二―一七七八）は氷玉道人、氷玉主人と号し、宗室の文壇では名の知られた人物だった。その著作が「明善堂集」に収められているほか、才子佳人小説「平山冷燕」に題詞を記したりしている。満族文学史

家によれば、清代の満族文学は、納蘭性徳に代表される順治、康熙年間の清新な詩風と文昭などの「神韻」派の後を承けて、乾隆期に最高峰に達したと言われるが、その乾隆期の詩壇の中心人物の一人が弘暁であった。沈徳潜の「格調」、袁枚の「性靈」と同時期に北方には「建安」派とも言うべき一群の人々がいた。身は宗室に連なりながらも、政治の中核からは弾き出され、詩酒のうちに反俗の姿勢を幾分か保ち続けていた詩人たちである。弘暁はその中心的人物であった。楽府の「君馬黃」という作品などにその反俗的姿勢を見ることができる。

論心投分応交人

如何交富不交貧

世間輕薄都若此

貧富移心復可恥

一朝冷落繁華已

貧富原来無定耳

心意氣こそ交わりの道

何で貧富の差があるう。

それを世間の輕薄さ

金に引かれて恥じもせぬ。

いずれはおちぶれはてるもの

貧富に定めはありはせぬ。

弘暁と交際のあった愛新覺羅敦敏、敦誠兄弟はヌルハチの第十二子アジゲの五代目の子孫である。アジゲはドル

ゴンの死後監禁されて死を賜り、旗籍を没収され、その子孫もしばしば冷遇されてきた。兄敦敏は細やかな心情を託した小品に優れているが、「典裘」のように豪放な長詩もある。

相呼復大叫

対坐松石辺

三杯豈云聖

一斗何足仙

金樽自須滿

不必拘千金

莫愁瓶壘磬

春服尚可捐

大声で喚ばわりあって

松の下の石に座を占め

三杯じゃ聖人になれず、

一斗でも仙人に足りぬ。

酒樽に酒さえあれば

千金もちっぽけなこと。

酒樽が空になったら

春の服を質に入れるさ。

正確にいうならば建安の氣風を盛唐の杜甫を介して吸収したというべきで、杜甫への傾斜は敦敏の弟敦誠に著しく見られる。怡親王弘曉は彼等の中では別格に身分の高い人物だが、精神的に一脈相い通じるものをもっていたのである。

さらに彼等に共通した風土として北京の西山があった。それは敦敏の詩集の中の愛すべき小品に、敦誠の淡雅な遊記にしばしば現れる。

斗酒 柑春正濃

蒼畦古寺旧遊踪

一鞭殘照吟帰晚

今宿西山第幾峰

酔うて橘 春の香しげく

昔を忍ぶ 山の端の寺

鞭響かせて 夕日に去りし

君はいずこの 峰に宿るや。

(愛新覚羅敦敏)

弘晩にも父胤祥の後をついで臥仏寺、退谷亭の修築に当った関係があり、西山を題材にした詩が数多く残されている。

晩至五華寺

清和殘照麦風柔

景物凭欄一放眸

題材漫勞紅袖拂

詩情画意綵風流

夕日しずかに 麦を吹く風

この欄干に 眺めは尽きず。

筆取るかいなに 紅の袖
一筆ごとに 絡み着く恋。

このような「一群の詩人」たちと曹雪芹との係わりを証明する資料は断片的にはいくらか存在している。とりわけ愛新覚羅敦敏、愛新覚羅敦誠兄弟の作品は胡適の「紅樓夢考証」以来しばしば引用されてきた。ただし、詩はあくまでも詩であって、その主題はあくまでも詩人の魂であり、「紅樓夢」の考証材料などではないことを引用者はしばしば無視している。愛新覚羅敦敏の清澄な感傷の中に描かれる曹雪芹も、愛新覚羅敦誠の豪快な反俗性の中に描かれる曹雪芹も「昭明文選」や「杜少陵集」の典故に多くの形象を借りた詩的眞実である。

十、瓶湖懋齋記録

乾隆二十年、弘暎の父怡親王胤祥を祭った各地の賢王祠に対し廟で「関帝廟なりなんりにしてしまえ」という直論が下った。その三年後の乾隆二十三年、愛新覚羅敦敏が白家疇を尋ねている。このことは敦敏の「瓶湖懋齋記盛」に見える。この「瓶湖懋齋記盛」は孔祥沢の模写本が存在しているが、現物は戦後の混乱のときに日本にわたったらしい。「瓶湖懋齋記盛」は呉恩裕が不明の部分をつめて整理したものが刊行されている。以下、呉恩裕の補った部分に「」、私の訳註を（）に示しながら、敦敏が白家疇を尋ねた部分を読んでみる。

「叔父が福健から携えてきた」字画の鑑定には当然曹雪芹を推すところだが、しばらく顔を合わせていない。（原注、春、芹圃が私の家を尋ねてきて、白家疇に移るところだと言った。私もちょうど通州に過公に会いに行くところで、その後は会わずじまいだった）かしどうしても会いたくて仕方なく、（白家疇の）新居を尋ねることにした。何度も「道を尋ねて」やっとその家に着いた。（原注、「その地は」細い川が道をさえぎり、岸を隔てて、四〔間〕の土造りの家が見える。「石」を積んで壁にし、木の枝を切り取って垂木にし、垣根も高さが不揃いで、戸や窓もしっくりしていない。しかし、中庭はこぎれいに手入れされ、垣根には美しく蔓草が纏い、「五字缺」

陋巷の一瓢の飲の「楽しみ」を感じさせ、月に酔い花に迷う趣を得ていた。川に沿って北に行き、〔石〕橋を渡るとそこに〔着く〕「幾度も」垣根を叩くと、ややあって一人の老婆が応接に出た。

「お客様は」雪芹どのを尋ねていらっしゃったか。」私は「左様。」と答えた。老婆がいうには「あのかたは」人に招かれていったまま、もの何日も家に帰っておらんのだ。」老婆は白という姓で、雪芹の哀れみを受けて一家のように暮らしているのだと言った。（原注、丁寧な「私を家に通し」どこからきたのか尋ねたので、ありのままに答えた。）結局、名前を書いた紙を置き、宜しく伝えてほしいと云い残して、がっかりして帰って来た。

それから一月余りだったが、芹圃は「まだ」戻らなかった。思いやみがたく、馬に鞭打って再び尋ねて行った。門のところで白老婆に会ったが、私にこう告げるのだった。「なんとまあうまくゆかんものじゃ。何日前、雪芹どのが帰られ、あなたさまのお名前を見るなり、喜んでこの老いぼれにおっしゃった。あなたさまとは親しい間で、前から会おうとは思っていたのだが、こちらの友達に招かれて手を貸しているものだから、抜け出すこともできない。用が終わったらすぐに城内に行ってお目にかかる。そうおっしゃっておられたのじゃ。きっとあなたさまがこうしてまた来ようとは思ひもかけなかったことなのじゃろう、二日ほど前またそのお友達のところに行かれた。」（原注、そのとき白老婆は芋をうででごちそうしてくれながら、身の上話をしてくれた。初め、老婆には息子が一人いたが、生まれて間もなく父親を亡くし、父方の家には財産もなかった。十本の指で他人の花嫁衣装をこしらえて生活を支えた。しかしその子も二十歳過ぎに伝染病にかかって死んでしまい、「老婆は結局」ある立派な家に雇われて、二度と自分の家庭は持たなかった。去年の冬、泣きすぎて両の目を潰し、「そのためついに」追いついてしまひ、しばらくその甥のもとに身を寄せていた。しかし医薬も「無い」し、食うにも事欠く始末、絶望の縁に瀕してしまひ。そのようなき雪芹がその甥のところを通りかかり、薬石を「あたえて助けてくれた」ので、春には物が見えるようになった。雪芹がまた白家噺に「はるばる」移ると聞いて、老婆は「人」に「頼んで言付け」その「墓地の」かたわらの「木」を「雪芹の」「家」の建築に提供したいと頼んだ。「その」普請がすむと「雪芹」は「一室を白老婆に与えて住ませたのである。」「老婆」は泣きながら続けた。「雪芹どのがここに移られた当初、しじゅう城内から人が

きて絵を頼んでおりました。都のご大家で欲しいものがたくさんあったのです。雪芹どのは貧乏で食うにも事欠くことがしばしばでしたが、どんなに金を積まれても承知しようとはしませんでした。多少小銭があると、身よりのないものにやってしまったわけです。この老いばれもし雪芹どのお目にかからなかったら、どうして今まで生き延びられたことやら。」白老婆の言葉を聞いてますます雪芹にあって日頃の思いを慰めなくなったが、「いけません」すれちがいばかりで「縁が」薄いものらしい。しばらく答える言葉もなかった。(中略)

十二月の二十日、過公が二十四日の「一字缺」時に約束を取りつけてくれて、名刺をもって肅董公のところに行くことになった。翌日、春のように晴れて暖かった。いつもならこの月はひどく寒いのだが、今年ばかりは暖かった。「朝起きて」足の向くままに城門を出て、南の酒(紹興酒)を買おうと、何軒か覗いたが、どれも氣にいらず、また菜市口に行って、紙屋を覗き、結局宣紙を何枚か買った。店を出ると、突然かんだかい笑い声がした。その声のほうに目をやると、なんと雪芹ではないか。ひとに無理やり一杯さそわれて、ことわっても承知してもらえず、行くの行かぬのと話が長くなり、通行人も足を止めて困んでいる。私が行って声を掛けたのでやっと人垣が解けた。芹圃は思わず大喜びで私にこう言った。「二度も足を運んでくれたのに、留守をしてまことに申し訳なかった。今度城内に來たが、もとよりおたずねするつもりだった。はからずもここでお目にかかれようとは、何という奇遇だろう。」一杯さそっていたものも「芹」圃と「再会を期して」別れていった。

(後略)

この文章によれば乾隆二十三年の「春」から初夏(蔓草が纏い「蔓植杞藤」にかけて曹雪芹は白家噺に移り住み、十二月二十一日からさかのほってさほど遠くない冬の日に城内に姿を現している。この文章はここには訳出しなかったが、全体としては曹雪芹の多芸ぶりを紹介するのが目的なので、敦敏が白家噺に二度曹雪芹を尋ねとるころは、ことよったら三国志演義の草廬三顧のような芸術的誇張がなされているかもしれない。ここでその骨子だけを取り出して見てみる。

(一)「乾隆二十三年」の春、曹雪芹は愛新覺羅敦敏に「白家噺に移る」と告げた。おそらく初夏の頃敦敏は白家を噺訪ねたが、曹雪芹は「人に招かれていったまま、もう何日も家に帰っていない。

(二) 一月余り後敦敏がもう一度白家疇を訪ねたが、そのときにも「二日前から友人のところに行ったきりで帰っていない。」曹雪芹は友人に協力を頼まれていて忙しいのである。

(三) 十二月二十一日、敦敏は菜市口でばったり曹雪芹にでくわした。

さらに曹雪芹の行動を軸にしてみると、曹雪芹が白家疇に移ったことの中には「友人に招かれて力を貸す(友人邀做臂助)」という理由が考えられ、そのために始終家をあげっぱなしにしていたのである。十二月曹雪芹は突然城内に姿を現す。その場所は「菜市口」である。敦敏もそこで宣紙を何枚かかっているが、ここは有名な書籍文具骨董市場、琉璃廠の入口である。

翌乾隆二十四年には「脂硯齋重評石頭記・己卯本(己卯冬月定本)」が完成し、怡親王弘曉のもとで、写本が製作されている。曹雪芹はなぜ白家疇に行ったのだらう。前述のとおり白家疇は怡親王胤祥が水利工事を任せられたところで、彼の別荘もあり、死後は賢王爺を建てて祭られている。全国の賢王祠は改造されたが、ここは怡親王胤祥の家廟であり賢王祠王爺殿は現在まで残されており、その門前の舞台は民国元年に修築されたもので、近代まで賑わいを見せたことを物語っている。怡親王胤祥の子弘曉は父の後をついて臥仏寺や退谷の修築に勤めた。しかし乾隆帝のもとでは危険な勢力として押さえ付けられ、ついには爵位をも奪われてしまう。この不遇な貴族と曹雪芹の「紅樓夢」との関係は深い。

怡親王弘曉は愛新覺羅敦敏敦誠兄弟を介して曹雪芹を白家疇に招いた。住居は別にあてがったが、秘密裏に原稿を整理する場所も用意しておいた。原稿は怡親王府の人々の手で清書され「脂硯齋重評石頭記・己卯本(己卯冬月定本)」となり、曹雪芹の手稿は埋没してしまった。

北京香山正白旗の旗營で、白家疇の山村でどのようなことが起こったのか。目下のところそれを明らかにする資料は存在していない。やや抽象的な言い方をすれば、武断のそしりは免れよう。

政争に敗れた貴族たちのけして口に出すことのできない感情がこの地での「紅樓夢」成立を促し、最古の写本として結晶したといえるのである。

当時の中国でも、現代の中国でも、北京西山というのはかなり特殊な地域である。名所旧跡を前面に控えて、一

歩それれば一般人を寄せつけない軍の施設が点在している。皮肉にも「清朝の旗営は現代の兵営だ」と言われる。権力者と、権力を失ったものと、もともとそんな物とは縁のない人々が、それぞれの思いを抱いて、古い言い伝えの秘められた美しい山々に囲まれて暮らしている。

後記

一九八九年六月四日の天安門事件が起こるほんの少し前、私は北京西郊古城路の妻の実家の北窓から、なだらかな香山の山々を見つめていた。折りに触れて私その山を訪れ、その山懐でいたって地道に研究を続けている「中国曹雪芹研究会」の李強氏と、「紅樓夢」談義に夜をふかすのが楽しみだった。一九八七年の旧正月から放送された連続テレビドラマ「紅樓夢」の好評を受けて、「曹雪芹夢断西山」という短編ドラマが香山で撮影され、「中国曹雪芹研究会」のいわば濃厚な地域性をもった研究が、ようやく全国に紹介されようとしていたその矢先にこの天安門事件が起こったのである。この事件と「紅樓夢」といった何の関係があるのかと問われるだろうが、実はきわめて深刻な関係がある。周知の通り一九八九年の天安門事件は、胡耀邦追悼に集まった学生たちが、腐敗した官僚主義を批判し、民主を求めることから起こった。天安門事件の後、胡耀邦に代表される改革派は政治の中枢から後退を余儀なくされたが、それは純粋な学問研究の世界にまで波及した。中国の政治と学問とは常にかかる関係にある。胡耀邦の長男胡德平の胡耀邦の棺の前での写真が日本でも紹介された。胡耀邦の長男胡德平はほかでもない「中国曹雪芹研究会」の顧問で、すでに香山正白旗の老人舒成煦の口述を筆記した「曹雪芹在西山」、雍正帝と香山との関係を詳述した「三教合流的香山世界」、それに曹寅の詩における香山の背景を論じた「曹雪芹故居の探討」などの著作を発表していた。彼は実に質素で謙虚な研究者で、香山の無名な貧しい人々の語る言い伝えをこまめに筆記し、文字の消えなかった石碑を丁寧に書き写し、「紅樓夢」と北京香山との関係を明らかにしようとする努力していたのである。政界の幹部の子供たち、現代の俗語で言う「八旗子弟」が特権乱用の批判にさらされている中で、胡耀邦の「阿哥（子息・満州語）」胡德平の行いは実に愛すべきものだった。

しかし、天安門事件の後、胡德平が地道な研究活動を続けていた「中国曹雪芹研究会」に対して「ブルジョワ自

由化の道を歩む悪の巢窟（資産階級自由化的淵藪）」というレッテルが張られ、一切の活動に制限が加えられた。私
が「中国曹雪芹研究会」の名義で外文出版社に渡した原稿「紅樓夢与香山伝説」も破棄同然の目に合わされてしま
い、通信もとだえた。

学生たちの民主化要求運動が高まる中で、テレビドラマ「紅樓夢」のために作曲された王立平の美しいテーマ音
楽が全国津々浦々に流れていたことも記憶に新しい。このドラマのオープニングには決まって山の中の寂しい岩が
写し出され、エンディングは毎回登場人物のクローズアップであった。生活の隅々にまで浸透している封建思想か
ら個性の解放を求めて傷付き、倒れていったのが賈宝玉と林黛玉の悲劇なら、あの学生たちの苦しみも恐らく同質
のものであった。八十年代末の空前の「紅樓夢熱」はあの苦者たちの心のわだかまりと無関係ではなかったはずで
ある。

前回「教養部紀要七八号」に発表した「北京香山正白旗——その歴史と伝説」と同様、この文章も「中国曹雪芹
研究会」の研究に基づき、八十年代「紅学」の一分野を紹介し、若干の個人的見解を加えたものである。

主要参考資料

- 一 「勅賜白家疇賢王祠祭田碑記」
北京市海淀区白家疇小学校
- 二 「脂硯齋重評石頭記・己卯本（己卯冬月定本）」
- 三 「脂硯齋重評石頭記・庚辰本（庚辰秋月定本）」
- 四 「脂硯齋重評石頭記・甲戌本」
- 五 「關於江寧織造曹家档案史料」
- 六 愛新覺羅敦敏「懋齋詩集」
- 七 愛新覺羅敦敏「四松堂集」
- 八 愛新覺羅敦敏「瓶湖懋齋記盛」
- 九 （吳恩裕「曹雪芹叢考」所収）
彭菊玲等編「清代滿族作家詩詞選」

十「曹学論叢」

十一「紅樓解夢」

十二 胡德平「曹雪芹在西山」「三教合流的香山世界」